

# 古墳時代の布留遺跡

山内 紀嗣

## 1 都市化以前の布留遺跡（旧石器時代～弥生時代）（参考文献 9）

布留遺跡で出土する最も古い遺物は後期旧石器時代のナイフ形石器である。布留遺跡内およびその近辺を含めて3例ある。縄紋時代には早期に押型文を施したものが布留遺跡豊井（打破り）地区で出土している。ここでは浅い土坑が10数基みつき、中に焼石がぎっしりと入っていた。こうしたものが布留遺跡最古の遺構である。さらに布留遺跡布留（堂垣内）地区では縄紋時代中期末～後期初頭の頃の竪穴住居跡や土坑などがみつまっている。土坑からは硬玉製の玉珠が出土している。この地区の出土土器はかつては縄文土器の一型式として認識されていた「天理式」と呼称されていたものである。

弥生時代になると中期後半に布留遺跡柚之内（大東）地区で木棺墓がみつまっているが近辺からは住居跡は未検出である。後期後半になると布留遺跡内の東側山裾近くで集落が形成されてくる。北から布留遺跡豊田（ケヤキ）地区、同豊井（豊井前）地区、豊井（打破り）地区、布留（堂垣内）地区、柚之内（北池）・（大東）地区（布留遺跡山口池地点と一連のもの）などである。このような状況は布留遺跡から南の桜井市纏向遺跡に至るまで状況がよく似ている。この時期以降、布留遺跡では中心地を移動させながら現代まで継続して人々の生活が認められる。

## 2 古墳時代時代の布留遺跡

古墳時代前期にはとりたてて注目される遺構はみつからない。しかし、中期～後期には遺跡全体にその範囲が広がり、布留遺跡の地が最も栄えた時期といえる。布留遺跡の南には前期から存続する柚之内古墳群があり、北には5世紀末から築かれる石上・豊田古墳群がある。これらの古墳群のうち、前方後円墳や規模の大きな円墳が布留遺跡に居住していた首長の墳墓と考えられる。

ここでは布留遺跡の中心的な建物遺構や主要な遺物が出土した豊井地区、布留地区、柚之内地区と三島地区を中心に説明する。

### （1）柚之内（アゼクラ）地区（1976年調査）（文献 7）

この地区では規模は不明であるが、掘立柱建物2棟以上とその建物を守るように石葺きの護岸がみつまっている（図3）。護岸はくの字状に直角に曲がり、丁度前方後方墳のくびれ部の葺石と似ており、調査当初は前方後方墳の一部と考えていた。その後、群馬県三ツ寺Ⅰ遺跡の調査で、豪族居館の一端がわかるようになり、現在ではいわゆる居館の建物と周囲を区画・防御する護岸施設と考えている。護岸の直上や掘立柱建物の柱穴からは土師器高杯・甕・壺などが出土しており、須恵器は出土していないが、中期前半のものと想定している。

(2) 柚之内 (樋ノ下・ドウドウ) 地区 (1981・1987～1988年調査) (文献 6・9・11・12・14)

柚之内 (アゼクラ) 地区の北西約50m付近にあたり、石上神宮から西へ約700m離れる。この地区では縄紋時代後期中頃の自然流路と弥生時代終末期 (庄内式期) の溝のほか、古墳時代から平安時代前半までの柱穴450基、溝 5 条、井戸 3 基、土坑 2 基などがみつかった (図 4)。

溝 1 と呼ぶ巨大な溝は幅約15m、深さ約 2 mあり、約25mの長さを確認した。この地区から北東約90mにある布留 (ハイアガリ) 地区でみつかった溝と状況が同じであるところから、方向、深さなどを勘案して布留川から水をひいた人工流路であったと判断した。この溝は洪積世の層を掘りこんでおり、人工的なものであることは間違いない。溝 1 から土師器・須恵器のほか、韓式系土器、黒色土器、馬歯・馬骨、磚、瓦などが出土している。時期は最下層が 5 世紀後半頃で、埋まったのが11世紀頃と考えている。溝 1 の底には明らかに水の流れた際に堆積した砂利があり、かなりの水が流れていたことがわかる。奈良時代頃までは底をさらえながら使用していたとみられる。平安時代になると次第に埋まっていき、中世には窪みになっていたようである。

溝 2 は溝 1 から北西に直角にとりつき、約30mのあたりで南西に曲がり、約50m進んで、調査区外へ伸びる。幅は約 8 m、深さ約40cmある。溝 2 の掘削時期は 6 世紀前半であり、溝の中からは土器類が少量出土している (図 5) が、とりわけ須恵器器台や土師器器台があるほか、滑石製・土製の紡錘車が 5 点も出土している (図 6)。器台や実用的ではない紡錘車などの出土から、溝 2 の近くには祭場的な施設があったことを想像させる。土師器器台は我が国での同型式の例はなく、類例としては福岡県の小丸 1 号墳出土の器台形埴輪 (図 7) があげられる。強いて探せば朝鮮半島全羅南道の倭系古墳から出土するものにやや似ているものがある。

溝 1 の南東側には掘立柱建物が 7 棟のほか、竪穴住居跡が10棟ほどみつかった。掘立柱建物は総柱のものが 3 棟あり、高床建物であったことがわかる。そのうち高床建物 1 と高床建物 2 は南北に並び、軸線が全く同じであるところから同一時期の同大建物であり、あるいは1つながりであったかもしれない。建物の方位は真北に近い。現在のところ、別棟のものとしておく。高床建物 1 は南北 3 間、東西 5 間あり、当時の建物としては大規模である。また、高床建物 2 も同構造である。柱穴は両者とも平面円形のものもあるが、中には隅丸方形になるものもあり、堀方の直径は約80cm、柱痕がわかるものでは柱の直径は約 30cmあったことがわかる。柱の堀方などから土師器・須恵器が出土している。須恵器などの型式から中期後半の建物と考える。我が国でみつかった真北になる大型掘立柱建物としては最古の部類である。

溝 1 の南東側岸边には竪穴住居跡ばかりが群集していた (図 8)。住居跡は上面を削平されており、深さ約 5 ～10cmしかない。そのうちの第 4 号竪穴住居跡は平面長方形で長さ

約3.3m、幅約2.4mしかなく柱穴はない。通常の住居跡ではない。また、第14号竪穴住居跡では周溝から鉄鉋が出土した。さらに13号竪穴住居跡からは滑石製あるいは砂岩製の白玉や原石が出土しており玉造跡であった。このように竪穴住居跡は一般の住居ではなく、作業を行う工房か工人の住居跡とみられる。第14号竪穴住居跡出土の鉄鉋は古墳時代の住居跡から出土したものとして、唯一のものである。

高床建物3は高床建物1と重なっており、切り合い関係から高床建物3の方が新しい。これも高床建物1・2と軸線が平行するところから、続いて建てられたことがわかる。建物は東西4間、南北2間であるが、東と西の妻には棟持柱があったとみられる。柱穴の堀方は南北方向にやや長く、長さ約100cm×幅約50cmあり、柱痕から直径約30cmの太さがあったことがわかる。この建物の時期は土器片から、降っても6世紀初頭とみられる。

また、これらの高床建物の周囲にも数棟の掘立柱建物があるがそれらはいずれも規模がやや小型となり、時期は6世紀代であろう。

溝1の西北側にも数棟の掘立柱建物がある。溝1と屈曲した溝2で囲まれた長方形のなかでは掘立柱建物が7棟はある。概ね溝1と平行した軸線をもつものが多い。うち、高床建物4は梁行き2間、桁行き4間ある。柱穴は堀方が約30cmで柱痕は不明である。この周囲の建物は概ね6世紀前半頃とみている。

溝2の北西側にも掘立柱建物があるがこちらも概ね溝1・2と平行し、溝に規制されていることがわかる。6世紀から奈良時代頃までの建物を含む。

井戸は溝2の中でみつまっているが、奈良時代のものであり、掘形は直径約2mあり、深さ約3.5m。幅約60cm、長さ約1.5mほどの板を6角に組み合わせて井戸枠としている。中から土器類とともに軒丸瓦が出土した。平城京のものと同範である。

高床建物4の南で見つかった土坑は平面円形で直径約1.8m、深さ約1.5mあり、播鉢状になる。中から韓式系土器がまとまって出土した(図9)。そのうちの甕には鳥足状のスタンプ文様があり、百済系統のものであることがわかる。時期は異なるが溝2から出土した土師器器台も百済系統(全羅南道)と想定されることから、布留遺跡は新羅より百済・伽耶系統の人々の影響が強いのかもしれない。

### (3) 三島里中地区(1978～1980年調査)(文献10)

布留川の北岸約250mにあり、古墳時代の流路跡がみつかった。流路跡からは大量の土器類があるほか、木製品も大量に出土した。時期は4世紀後半から奈良時代までである。古墳時代の層位から出土した木製品は農具・武器類を中心に約600点あった。とりわけ武器類では刀剣装具の断片が60点余り(図10)あり、注目された。

刀剣装具は把頭・把縁・鞘・鞘口・鞘尻がある。鞘には故意に切断したものもあり、鞘の作り替えが行われたことを思わせる。木製のほか、鹿角製の鞘尻もあるが残り具合が悪い。本来は木製以外のものが多くあったことがわかる。

流路跡からは多くの鉄滓がある。これらには通常の鍛冶滓ではなく精錬鍛冶のものが含

まれ、鉄素材を他地域から搬入し武器や農具の製作にあたっていたことがわかる。地区は異なるが、杣之内（樋ノ下・ドウドウ）地区で出土した鉄鉋はその証左となるものである。武器類は概ね4世紀後半から6世紀前半までとみられる。従って、この地区で遺構はみつかっていないが流路の近くに武器工房があったとみられる。

#### （4）布留（堂垣内）地区（1955年調査）（文献3）

布留遺跡から北へ約200m付近になる。建物建設工事の途中にみつき、きちんとした調査はできていないが、ある程度の状況がわかる。それによれば、50×30mほど長方形の発掘区内に石敷きの部分があり、その部分で円筒埴輪と朝顔形埴輪が倒れた状態で25本余り出土したらしい。ここは古墳ではない場所であり、埴輪の窯跡でもない。石敷きの範囲は確定できないものの、埴輪で区画した祭場であったらしい（図11）。区画内からは土師器壺・高杯、滑石製白玉・勾玉のほかに土製の管玉（土錘？）などが出土している。

#### （5）豊井（宇久保）地区（1984年調査）（文献4）

布留川から北へ約400mあり、布留遺跡としては北辺地区である。布留川から分流した1本の流路とその岸部に掘立柱建物が4棟見つかっている。また、祭祀遺物の投棄場もある（図12）。掘立柱建物の方位はほぼ真北に近く杣之内（樋ノ下・ドウドウ）地区で見つかった建物と方向は近い。しかし、年代は出土遺物がほとんどなく不明である。他の遺構などとの関連から、6世紀後半とみている。祭祀遺物投棄場は流路の岸辺にあり、2m×1.5mの範囲に土師器高杯60以上、須恵器甕1、滑石製白玉787、勾玉2、有孔円盤1、鉄製ミニチュアの鎌・刀子・斧などがあり（図13）、祭祀に用いられた用具を一括して投棄した場所とわかる。この近くに祭場があったことがわかる。土器類から5世紀中葉であろう。

### 3 布留を大きく変えた「石上溝」について（文献2・5・8・13・15）

次にこうした都市化とは別に遺跡近くの開発について推測する。

布留遺跡杣之内（樋ノ下・ドウドウ）地区でみつかった溝1は、丘陵を北東から南西へ流れており、底の様子と堆積した土砂から、水が流れていたことは確実である。しかし、船を浮かべるほどの水量はなかったと考えられる。この溝が横断している丘陵の南側は小さな谷になっており、その西側に広がる平野は現在、水田地帯となっている。わざわざ丘陵を掘削して水を流すのはやはり農業用の水路と考えざるをえない。現在の国土地理院の地形図を観察しても水路は全くわからない。しかし、昭和37年撮影の航空写真（奈良文化財研究所蔵）ではわずかにその輪郭がわかり、やや窪んでいる。

参考までに述べると、現在丘陵を南側へ流れる水路は田村川と呼ばれ、丘陵の北裾を流れ、丘陵先端の一部を切るように西側の水田へ水を供給している（図14）。この田村川は中世にはすでに存在したとみられるが、あるいはその初源は古墳時代の溝1にあるのかもしれない。この布留川水系で水利権を持っているのは田村川の下流に位置している天理市<sup>たまち</sup>田町である。溝1の下流は田町を含んでいたとみられる。溝1が想定した下流の水田を潤

すとなれば（図15）約1050haにもなる。

このような5世紀の居館と農業用水路の開削事例については、有名な群馬県三ツ寺Ⅰ遺跡がある（文献4・14）。三ツ寺Ⅰ遺跡は榛名山の裾近くに築かれた居館（図16）で、近くにはその居館で生活していたと見られる首長の古墳3基がある。保渡田古墳群である。

能登健によれば、三ツ寺Ⅰ遺跡の近くには猿府川が流れており、元は唐沢川が遺跡から離れて流れていたのを、農業用の水路にするため猿府川として流路の変更をしたという（文献7/図17）。猿府川は現在でも流れているが、布留遺跡の溝1は平安時代には埋没してしまったのであろう。5世紀後半は首長による水路・溜め池などの工事が進行した時期かもしれない。

『日本書紀』履中天皇4年にみえる「石上溝」がこの溝1に相当する可能性がある。この点については履中天皇即位前紀に、天皇が即位する前に石上神宮に逃げ隠れている記事があり、履中天皇4年には唐突に「冬十月に、石上溝を掘る」とある。履中天皇は石上神宮に関係が深いことから、石上神宮に近接する場所でみつかった大規模な溝をそのように判断したのである。履中紀の記載がいつの時期であるかは明確でないが、おおむね5世紀後半でもいいと考える。

弥生時代から水稻耕作にともない水の管理は行われてきたのであろうが、鉄製農工具の普及により、堅い基盤でも簡単に掘削できるようになったのが5世紀であろう。それ以前では考えられない工事であった。このような事例は現在のところ三ツ寺Ⅰ遺跡と布留遺跡しかわかっていないが、『日本書紀』や『古事記』などにみられる池や溝を築造したとする記事すべてが律令時代の築造を古い時代に仮託したのではなく、実際に古い伝承を反映したものもあったと考える。

#### 4 まとめ

古墳時代の布留遺跡は5世紀になると首長の居館とみられる建物のほか、ガラスをはじめとする玉製品や鉄器あるいは武器の工房などが配置され、居館の近くには石上神宮などの宗教施設があり、人々と首長の住み分けもあったであろう。その遺跡を貫通するように農業用の水路が掘られていたことがわかる。当時の奈良盆地の中でも先進的な文化がもたらされている。とりわけ、朝鮮半島南部（百済）からの文物やヒトの交流が多くあったであろう。

その最も古い証拠の品物として、石上神宮に神宝として納められている七枝刀が挙げられよう。布留の開発にあたってはそうした渡来系の人々の力に負うところが大きかったとみられる。奈良盆地の中で首長居館とかれらの墳墓がわかる遺跡は少ない。

## [参考文献]

1. 置田雅昭「初期の朝顔形埴輪」『考古学雑誌』第63巻第3号 1977年
2. 置田雅昭「奈良県天理市布留遺跡の発掘調査—発掘した大溝と日本書紀の石上溝—」『月刊歴史教育』Vol 12-8 1980年
3. 置田雅昭『布留遺跡出土の埴輪』天理参考館資料案内シリーズ23 1989年
4. 太田三喜『布留遺跡豊井（宇久保）地区発掘調査報告書』（考古学調査研究中間報告書 24）埋蔵文化財天理教調査団 2006年
5. 下城正・女屋和志雄ほか『三ツ寺Ⅰ遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988年
6. 竹谷俊夫・日野宏「布留遺跡杉之内地区出土の初期須恵器と韓式系土師器—土壙出土の遺物をめぐって—」『韓式系土器研究』Ⅳ 1993年
7. 天理市教育委員会『布留遺跡範囲確認調査報告書』1979年
8. 能登健「三ツ寺Ⅰ遺跡の成立とその背景」『古代文化』42-2 1990
9. 埋蔵文化財天理教調査団『発掘調査20年』1991
10. 埋蔵文化財天理教調査団『布留遺跡三島（里中）地区発掘調査報告書』1995
11. 山内紀嗣「布留遺跡出土のガラス玉の鋳型」『天理参考館報』第4号 1991
12. 山内紀嗣「布留遺跡出土の鉄鉗」『天理参考館報』第10号 1997
13. 山内紀嗣「古墳時代の開発と環境」『シンポジウム 東アジアにおける環境と文明—考古学からのアプローチ—』金関恕編（文部科学省研究費補助金平成4年度重点領域研究）1993
14. 山内紀嗣「布留遺跡出土の器台形土器」『天理参考館報』第20号 2007
15. 若狭徹『古墳時代の地域社会復原 三ツ寺Ⅰ遺跡』（シリーズ「遺跡」を学ぶ 003）新泉社 2004

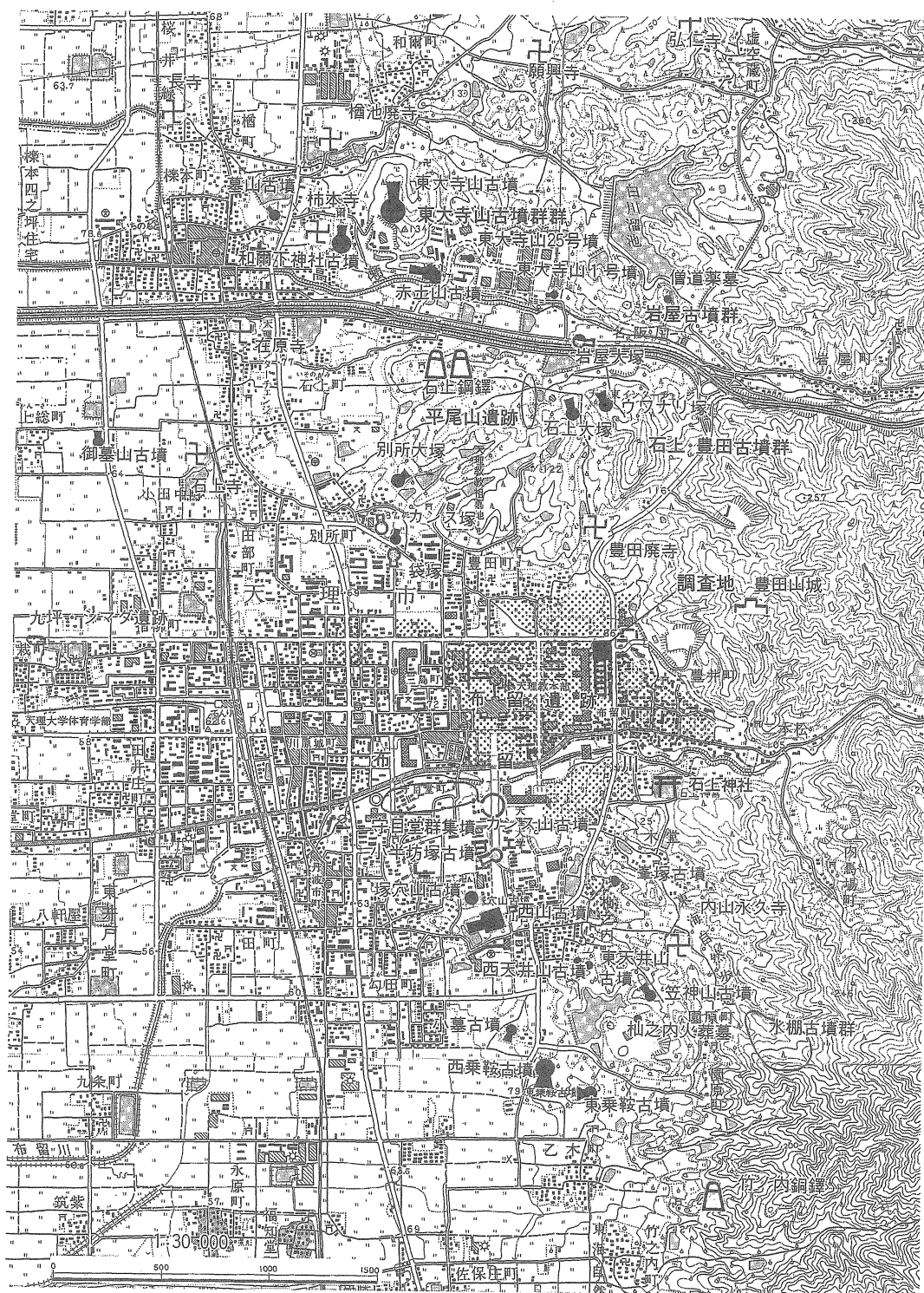


図1 布留遺跡周辺の遺跡

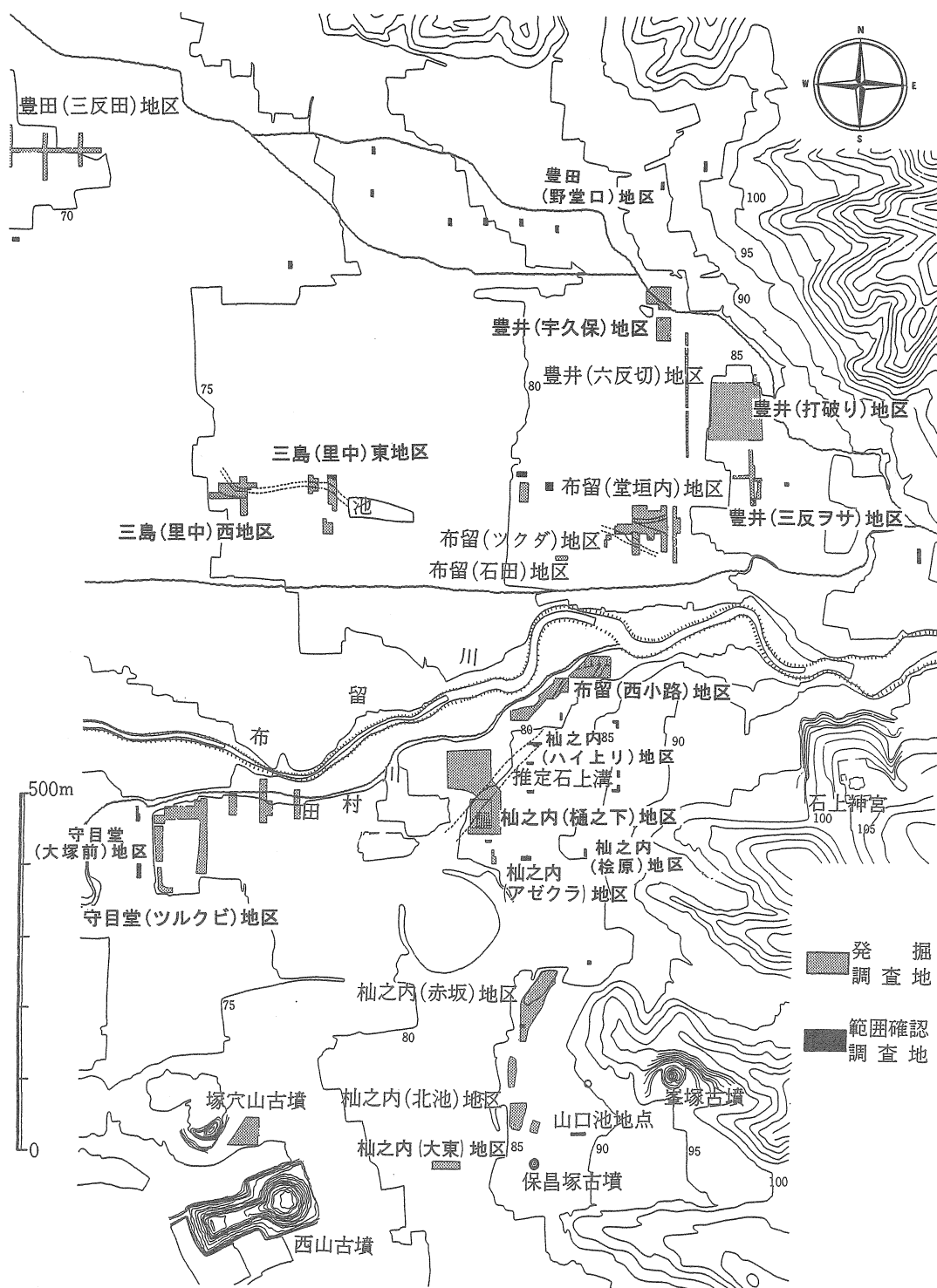


図2 布留遺跡の調査地位置図（文献4による）



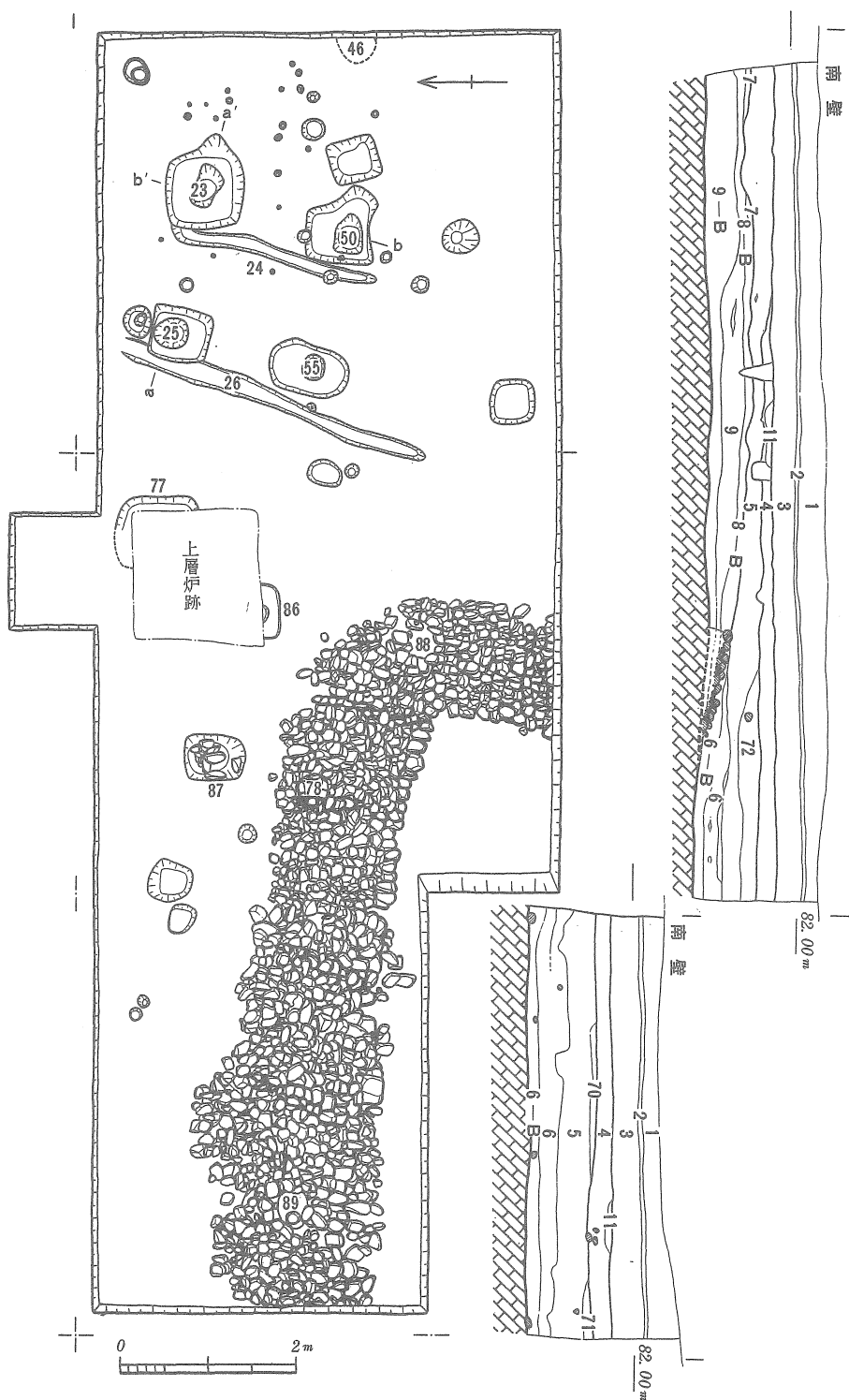


図3 アゼクラ地区の古墳時代中期の掘立柱建物と護岸の石葺き(居館)(文献7による)

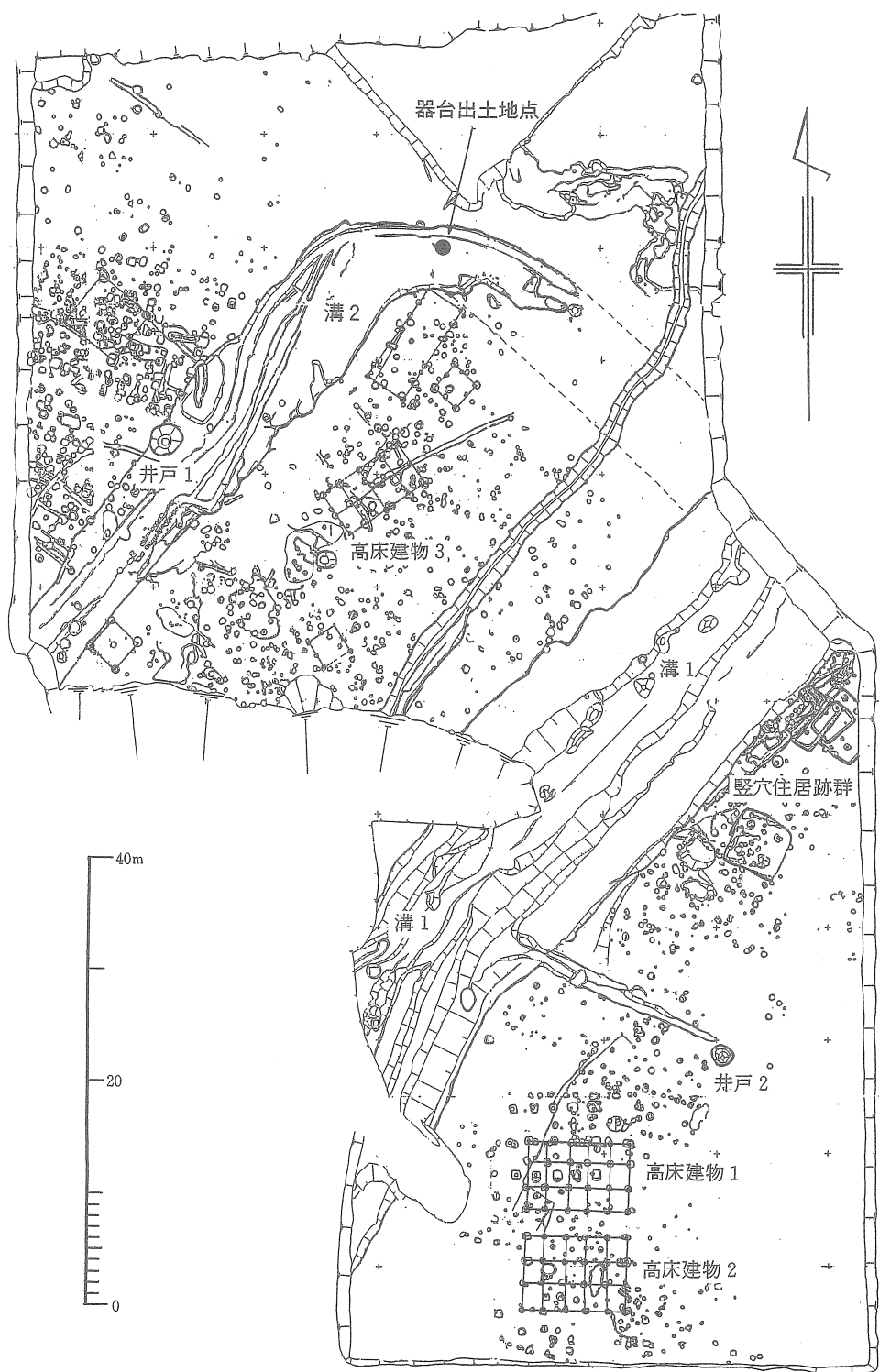


図4 布留遺跡布留遺跡内(樋ノ下・ドウドウ)地区遺構平面図(文献9による)

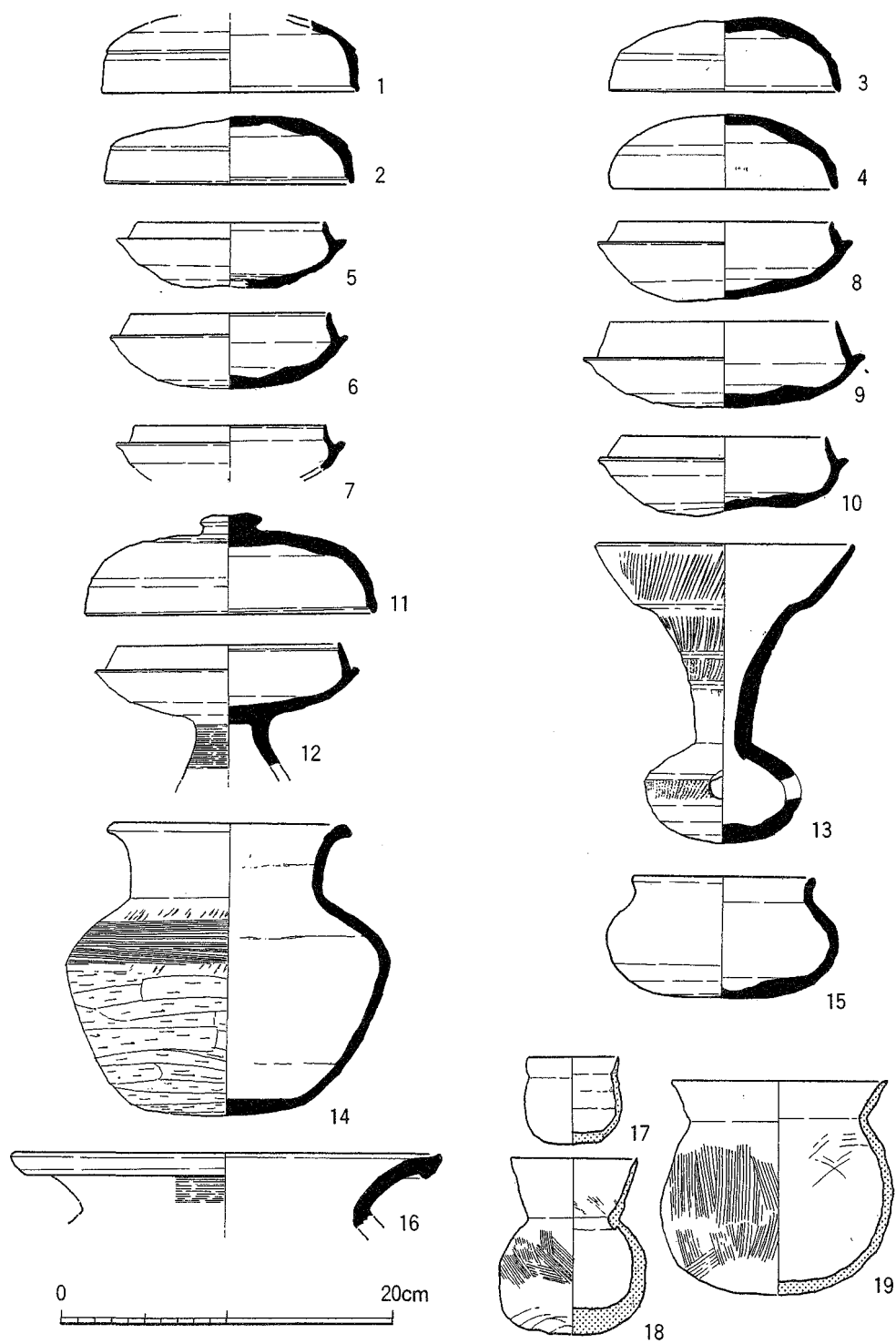


図5 溝2出土土器実測図（文献14による）

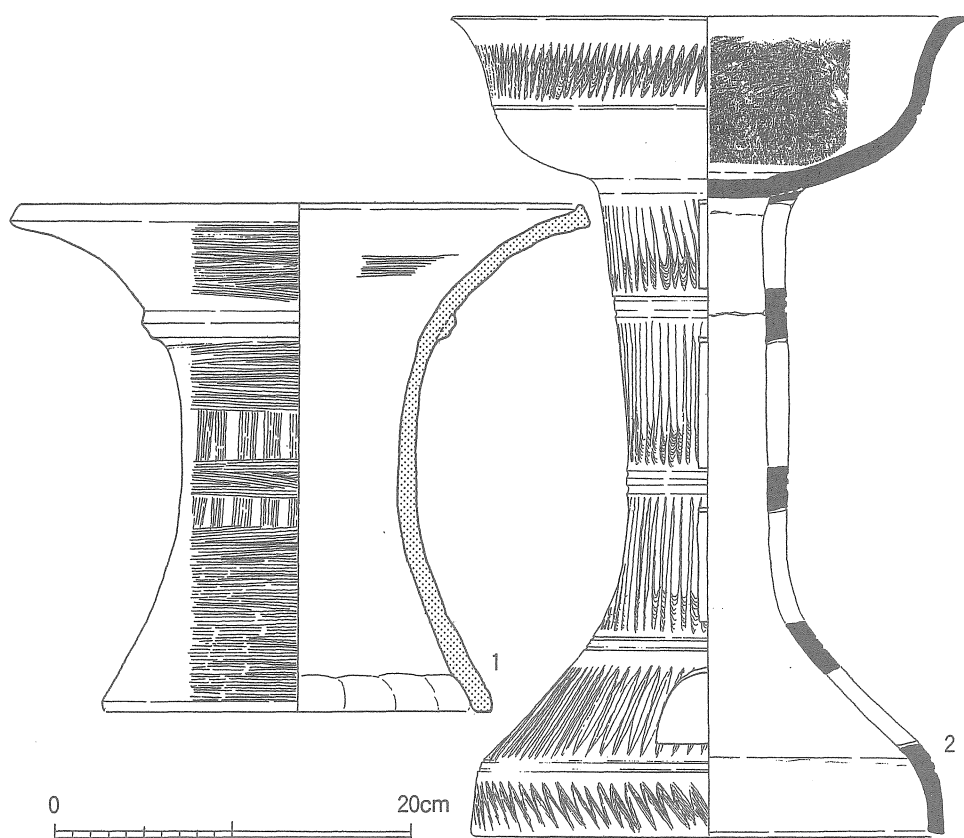


図6 器台形土器実測図

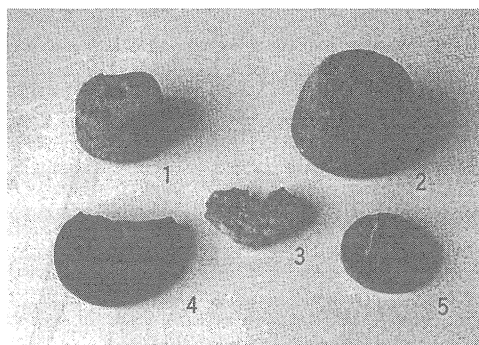


写真1 溝2出土紡錘車（文献14による）

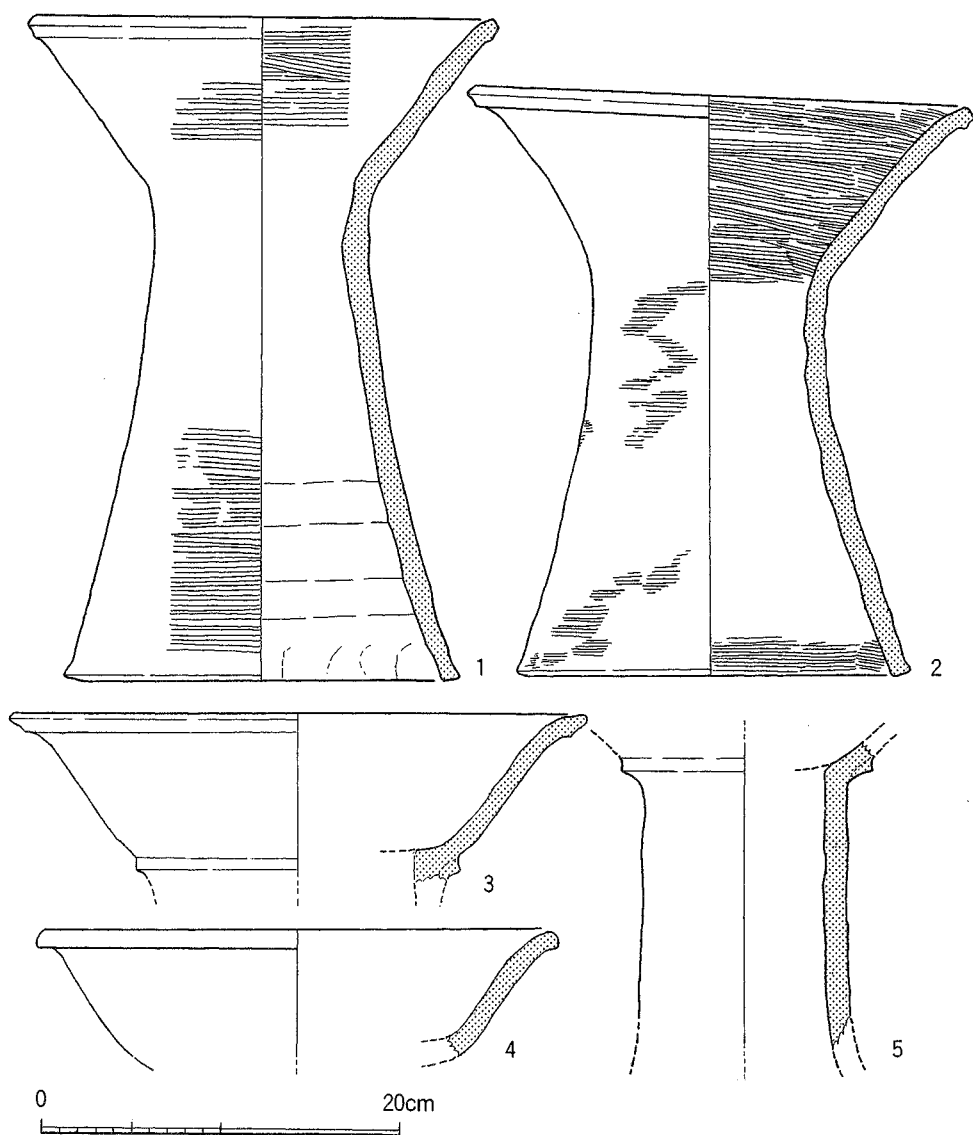


図7 小丸1号墳出土器台形土器実測図  
 (1・2は報告書よりトレース, 他は筆者が実測) (文献14による)

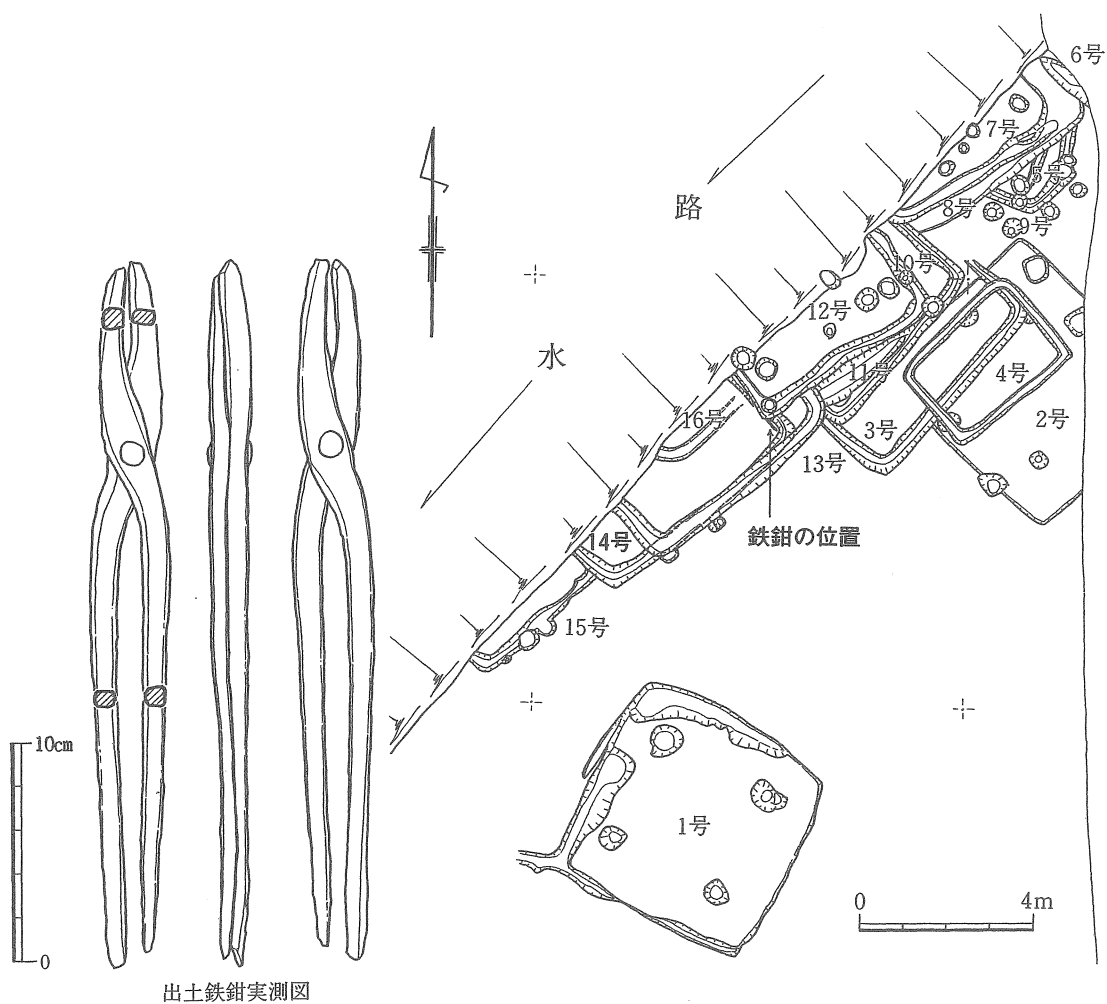
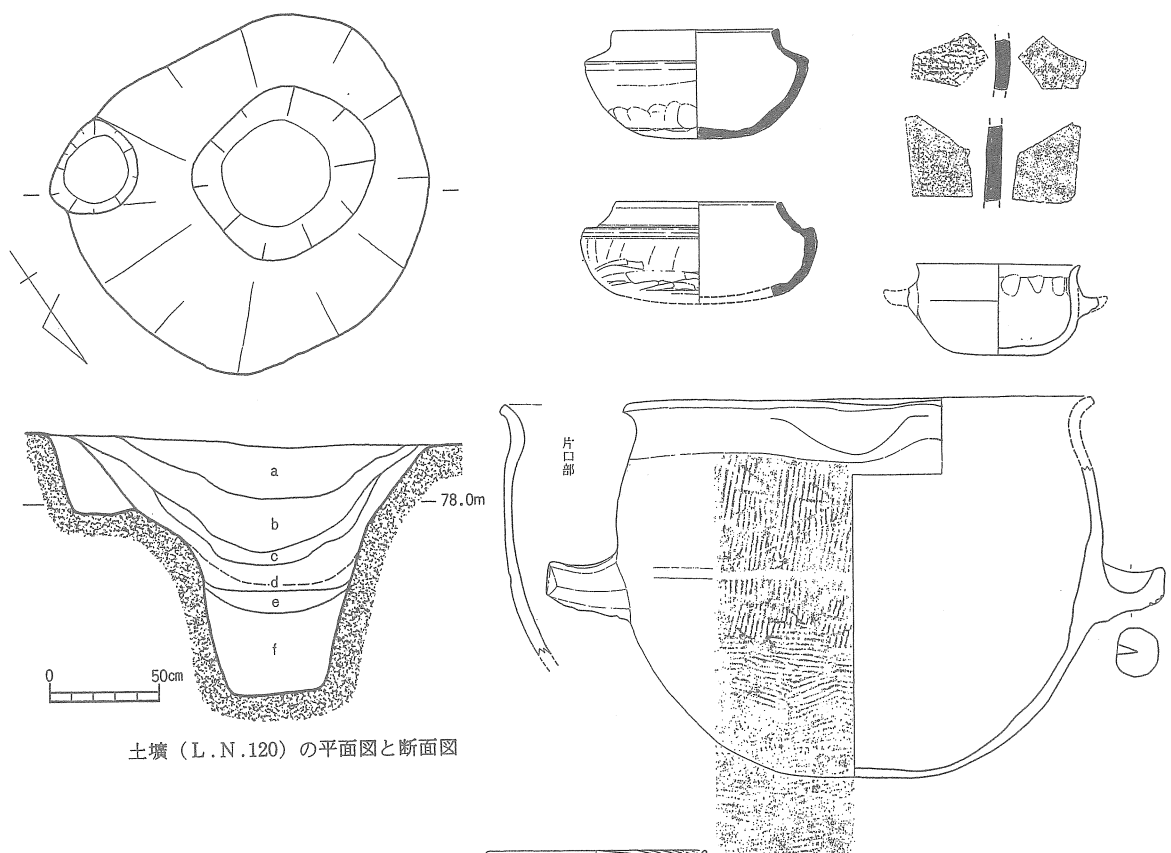


図8 竪穴住居跡群平面図（文献12による）



土坑（L.N.120）の平面図と断面図

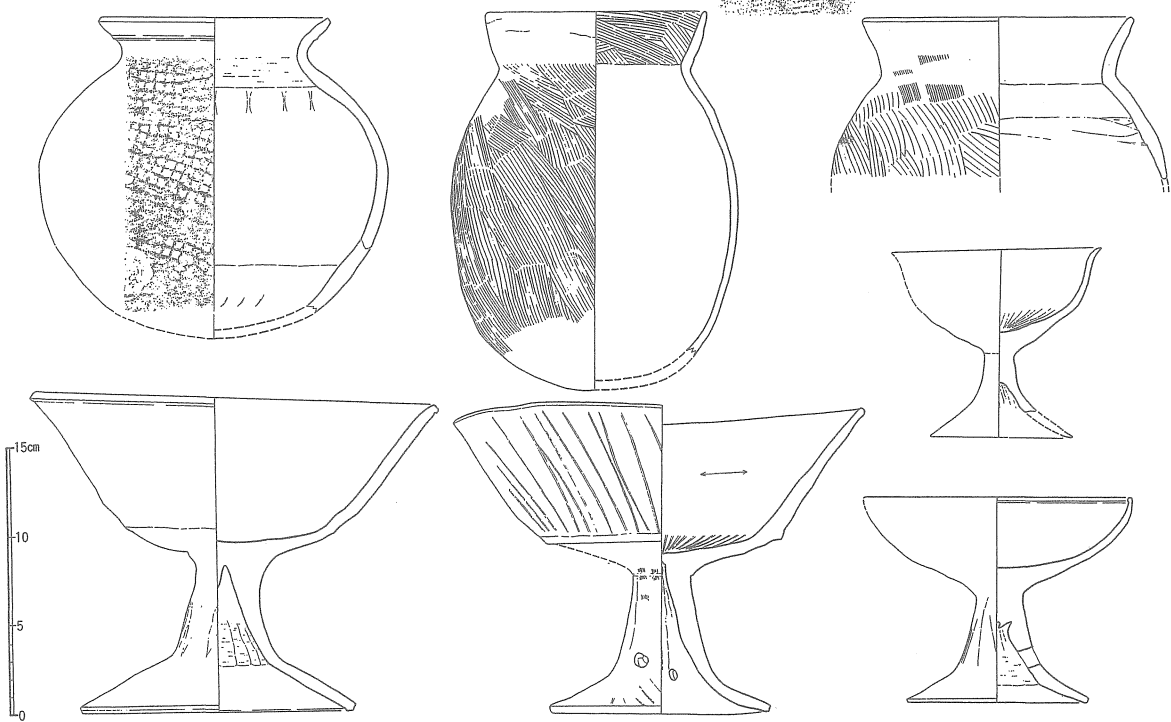


図9 土坑出土土器実測図（文献6による）

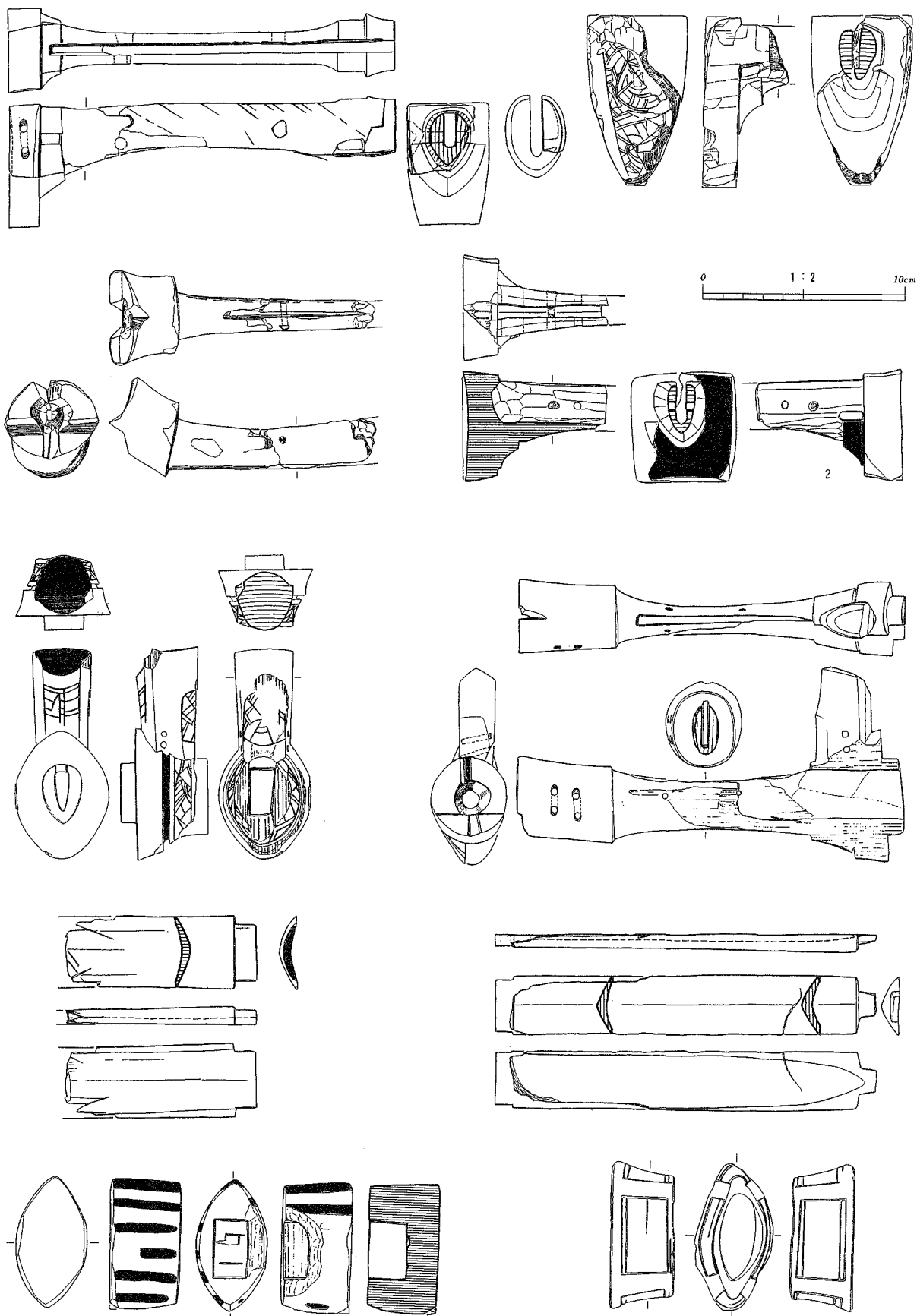


図10 三島（里中）地区出土刀剣装具実測図（文献10による）



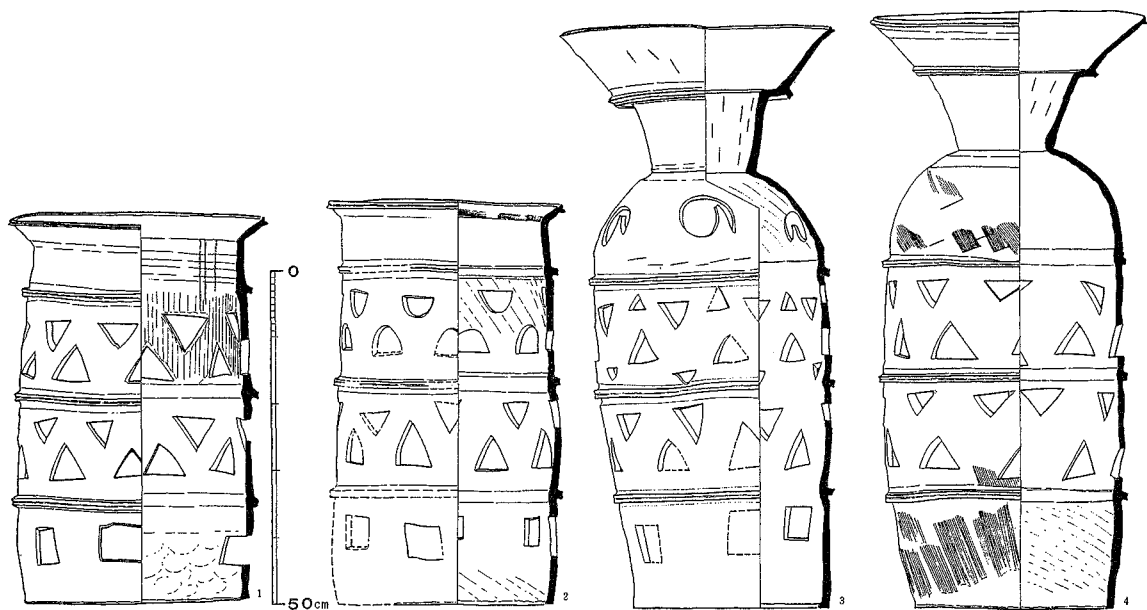


図11 布留（堂垣内）地区の祭場の一部と出土埴輪（文献3による）

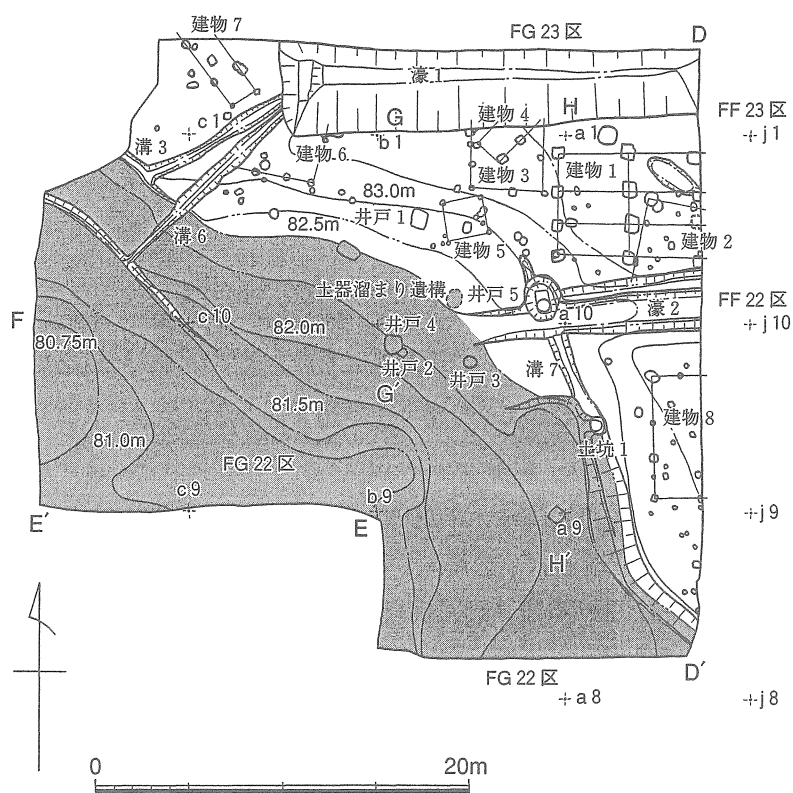


図12 豊井（宇久保）地区遺構平面図（文献4による）

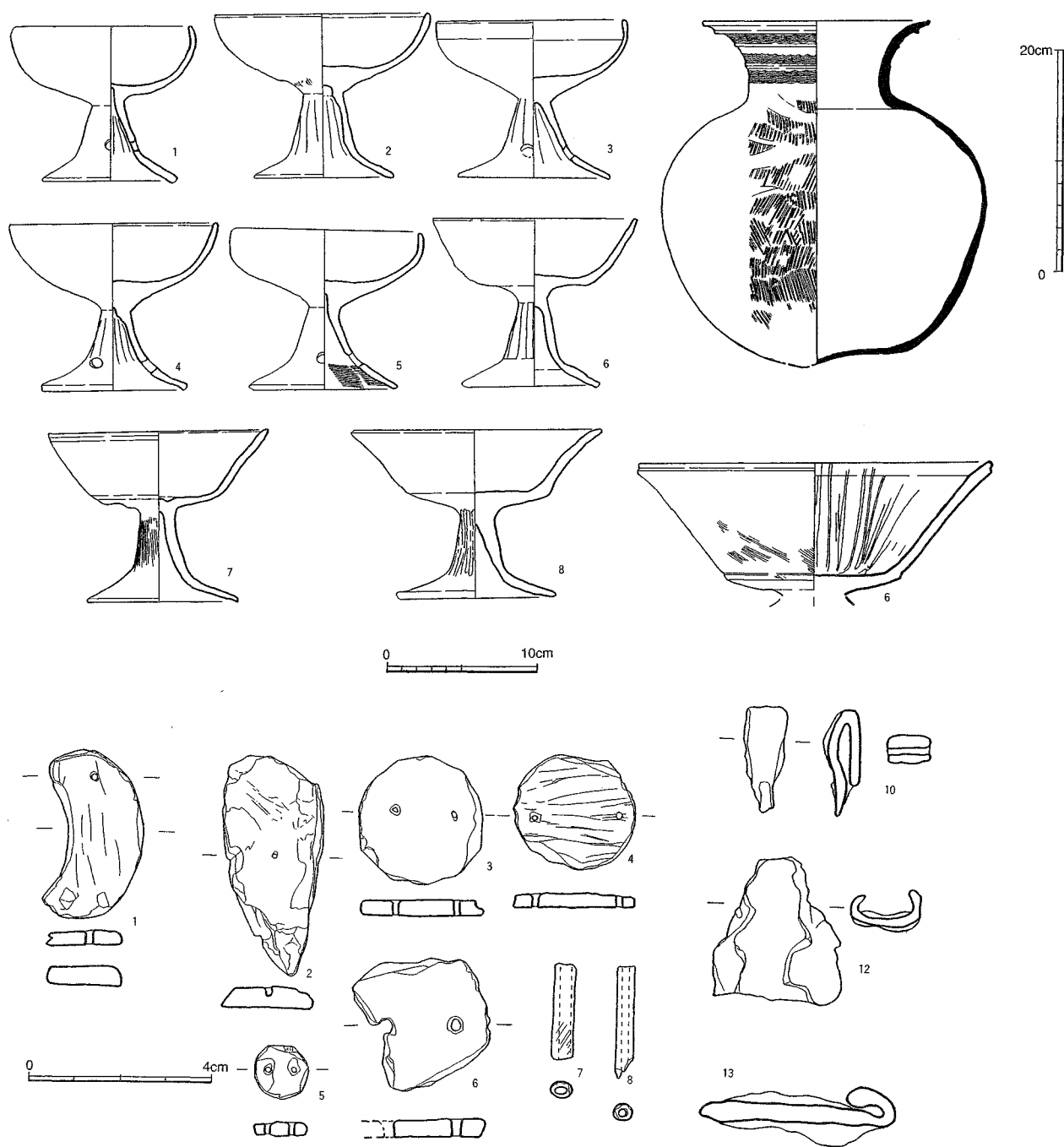


図13 豊井（宇久保）地区祭祀遺物（文献4による）

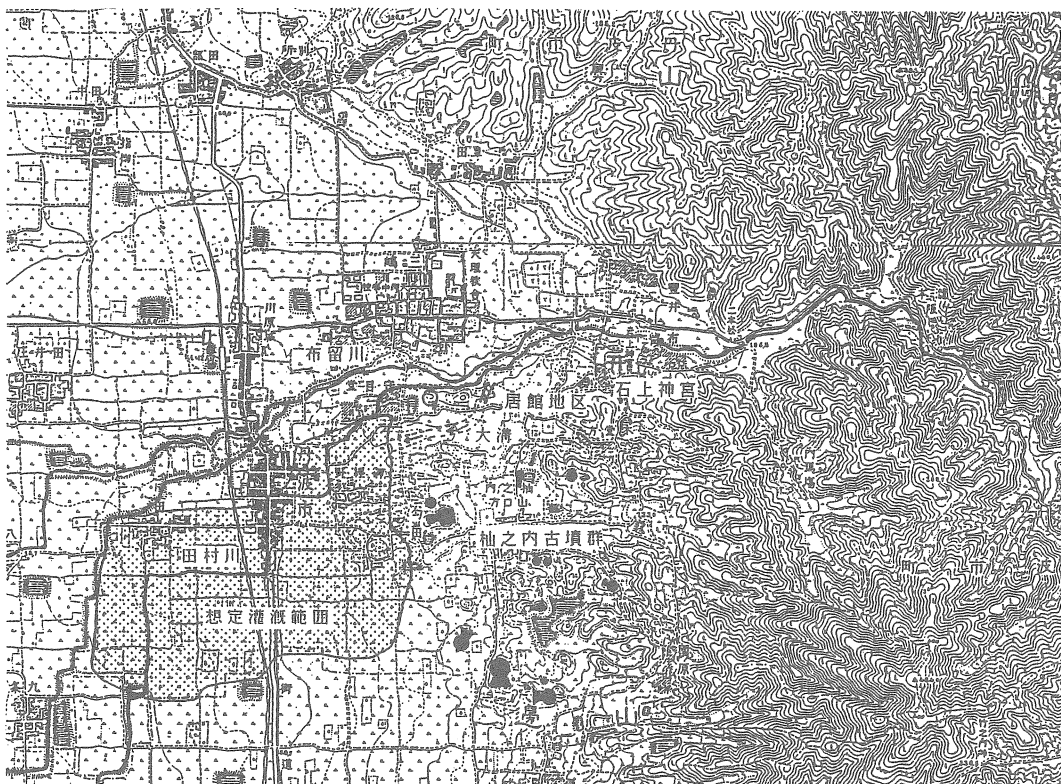


図15 布留遺跡周辺の地形  
(大日本帝国陸地測量部作成 2 万分の 1 『樺本』 明治41年、『丹波市』 明治45年)

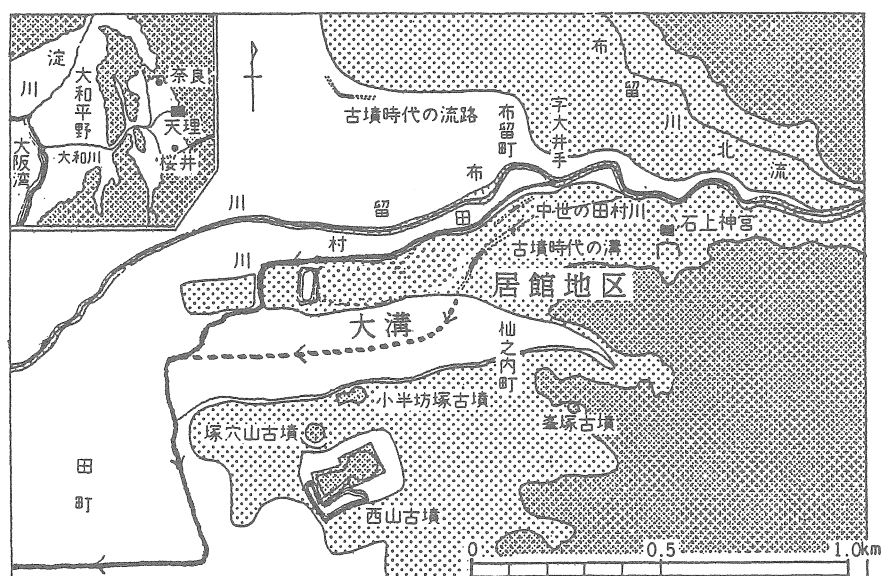


図14 田村側の流路の新旧  
(置田雅昭「奈良県天理市布留遺跡の発掘調査－発掘した大溝と日本書紀の石上溝－」  
『月刊歴史教育Vol12-8, 1980を一部改変』)

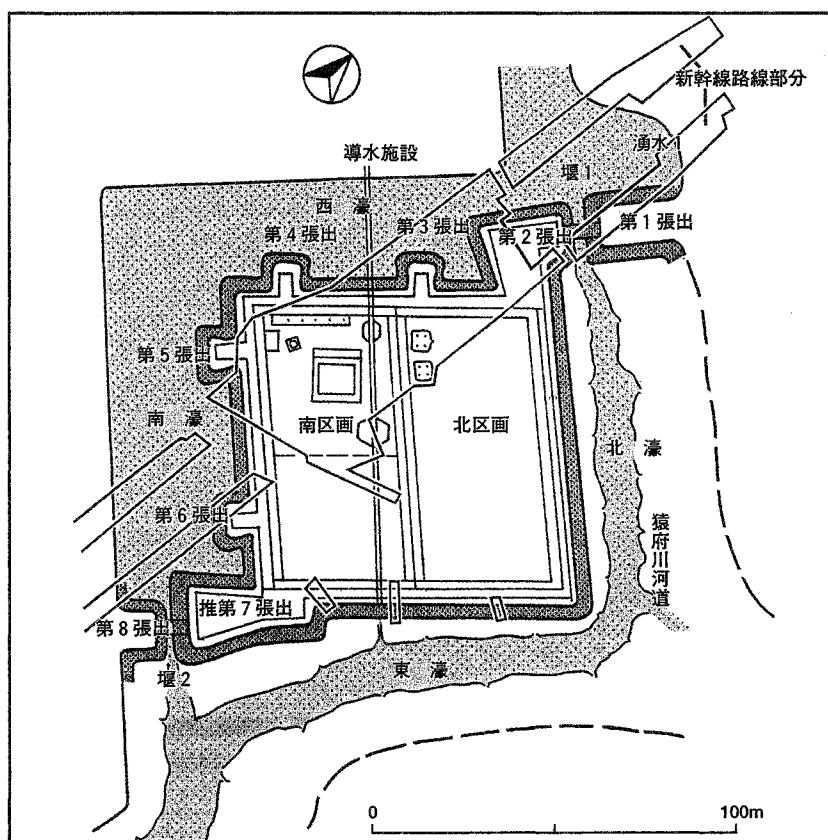


図16 ミツ寺 I 遺跡全体図（文献15による）

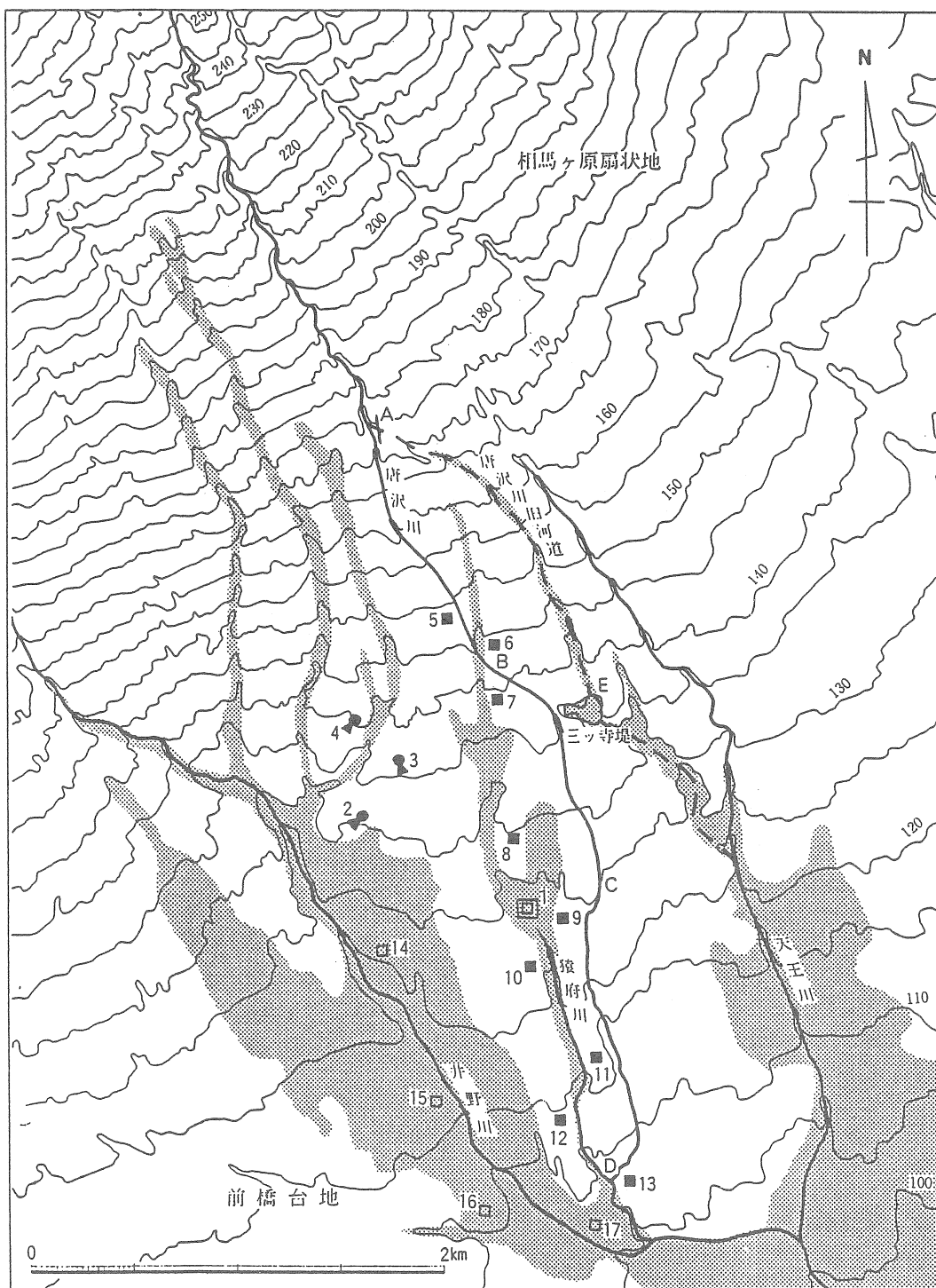


図17 三ツ寺遺跡周辺の地形（文献8による）

1：三ツ寺Ⅰ遺跡，2：二子山古墳，3：八幡塚古墳，4：薬師塚古墳，5：保渡田東遺跡，6：保渡田遺跡，7：三ツ寺Ⅲ遺跡，7三ツ寺Ⅱ遺跡，中林遺跡，10：井出村東遺跡，11：西浦北遺跡，12：熊野堂遺跡（第Ⅰ地区），13：雨壺遺跡，14：同道遺跡，15：御布呂遺跡，芦田貝戸遺跡，17：熊野堂遺跡